

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 36 回 「不可能」と言われたことも実現できる

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

米国ばかりでなく、日本中をも熱狂させてきた世界の野球の頂点である米大リーグのアメリカンリーグ 2023 年レギュラーシリーズが 10 月 1 日に終わり、44 本の本塁打を打ったロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平選手が本塁打王に輝きました。日本人選手が米大リーグで本塁打王になったのは史上初めてです。

今年 3 月の World Baseball Classic (WBC) で大谷選手は投打に大活躍して「侍^{さむらい} Japan」を世界一に導き、そのまま大リーグのシーズンを駆け抜けました。9 月に入ると、右肘やわき腹を痛め、それ以降の試合を欠場しましたが、本塁打は 2 位の選手に 5 本の差をつけるほどの独走でした。その他の打者部門では、打率が.304 でアメリカンリーグ 4 位、打点は 95 でした。投手部門では規定投球回数に達していないものの 10 勝 5 敗、防御率 3.14 で、「2 年連続 2 桁本塁打&2 桁勝利」は大リーグ初だそうです。

10 月 3 日付『産経新聞』によると、ストライクゾーンを 9 分割したうちの内角低めを除く 8 ゾーンで打率 3 割を超え、「相手投手としては、こうすれば抑えられるという配給パターンを見出しづらかった」(スポーツデータを収集・分析する「データスタジアム」の小林展久アナリスト) そうです。

大谷選手は岩手県の花巻東高校時代から直接大リーグに入って投打二刀流で活躍することを目指し、日本のプロ野球・ドラフト会議で指名した日本ハム・ファイターズへの入団を拒みませんでした。

当時の栗山英樹日本ハム監督らのデータを駆使^{くし}した必死の説得により^{ほんい}翻意して日本ハムに入団し、

プロ野球で二刀流として戦った後、米国に渡ったのはあまりにも有名です。日本ハム時代に^{じょうせい}醸成

された信頼関係もあり、栗山監督は 2023 年の侍 Japan 監督として、WBC に大谷選手を^{しょうへい}招聘し、優勝を実現しました。

野球 (Baseball) というスポーツは 2020 東京オリンピックでは女子ソフトボールと共に公式競技になり、その時も日本は金メダルを獲得しましたが、世界的に見れば、「大多数の国々で行われているスポーツ」とは言い難いかもしれません。留学生の皆さんの中にも、野球になじみの薄い人が多いと思います。

それでも、長々と大谷選手の二刀流を紹介しているのは、「世の中に『不可能』はない」ということを言いたいからです。

大谷選手は「野球少年がそのまま大リーガーになったようだ」と言われることがあります。高校野球や少年野球では、「打順は主砲である 4 番、投手としてはエース、そして主将」というワンマン選手がいるチームがトーナメント戦を勝ち上がることがあります。大谷選手もそうでした。

これに対してプロ野球や大リーグでは分業が進み、かつての世界の本塁打王、王貞治さんも、早稲田実業学校（高校）では「4番、投手」でしたが、プロ野球巨人に入団してからは打者に専念するなど、二刀流の選手はなかなか現れませんでした。しかし、大谷選手はプロになっても、大リーガーになっても子供のように野球を楽しみ、投打両立を成し遂げています。11年前、栗山監督は大谷選手について「投手と打者の2人が入団してくると思っている」（当時のスポーツ新聞）と言って、大切に育てて来たそうです。

この間、TBS系情報番組「サンデーモーニング」にスポーツご意見番として出演していた張本勲氏ら多くの野球解説者は「早く投打一方に専念しないとプロ野球選手として大成しない」などと言っていましたが、大谷はその不可能を可能にしました。米国の元大リーガーたちはそれを見て、「大谷は過去にだれも想像できなかつたことをやり遂げている」などと絶賛しています。

日本には「二兎を追うものは一兎を得ず」ということわざがあります。「2匹のウサギなど複数の物に同時に挑戦すると何も達成できず、手元に何も残らない」という意味でしょう。ところが、その二兎を得た人がいるわけです。不可能であると思ったことも、やりようや心がけによっては実現ができるということを証明して見せてくれました。

一方で、高校野球などで進学校が勝ち進むと「文武両道を実現している」という解説がよく出てきます。誤解を恐れずに書けば、高校在学中の3年間、スポーツだけに集中して、その競技でスポーツ推薦を受けて大学に行くような生徒でチームを構成している学校が勝つのが当然で、勉強をして普通入試で大学に入るような選手が多い学校が上位進出するのはレアケースだと思い込んでいる人たちやメディアが多いのでしょう。そこで、高校自体の入学が難しかったり、スポーツ推薦がない難関大学に進学したり、医学部などに入学する選手がいる学校が活躍したりすると「文武両道」という言葉が飛び交うのでしょう。

現場のスポーツ指導者の中には「文武両道では最高の競技はできない」という人がいます。確かに、勉強に時間を割いては、アスリートとして、最高のパフォーマンスの実現を逃す可能性があるかもしれません。文武両道は理想ではあり、一部のマスコミや学校経営者は気楽に使っていますが、「究極の勝負はできない」との嘲笑^{ちやうしやう}の言葉としての意味を含めている人もいます。

そうした中、筆者は最近「文武双全^{そうぜん}」という言葉大切にしています。先の大戦中の慶應義塾の塾長で、大学生時代は庭球選手、教員になってからは体育会庭球部長を務めた小泉信三教授が残した言葉です。文武両道は「勉学もスポーツも両方やる」という意味ですが、文武双全は「両方とも完璧にこなす」という意味で、勉学とスポーツの両方同時にトップを実現することの大切さを教えています。小泉塾長は「練習は不可能を可能にす」という言葉も残しています。徹底的に練習をすることで目標を超える成果を得ることを求めているのですが、文武双全はその延長線上で、「同時に勉学の面でも最高の努力をし、成果を残すことを目指す必要がある」ということでしょう。

さて、最高の結果を残すと言えば、大谷選手の本塁打王を報じるのと同じ10月3日の各紙の1

面トップ記事は「コロナワクチン ノーベル賞」(『産経新聞』の東京発行最終版の見出し)でした。米国ペンシルバニア大学のカタリン・カリコ特任教授とドリュー・ワイスマン教授が研究し、新型コロナウイルスで実現した「メッセンジャーRNA (mRNA) ワクチン」の技術開発に対し、2023年ノーベル生理学・医学賞が贈られました。

記事によると、ウイルスのたんぱく質を作りウイルス自体を使わない mRNA を医薬品に使うという発想が医学の世界になかった中で、カリコ氏らは研究を続け、2019年12月に新型コロナの感染が確認されてから1年以内に mRNA ワクチンを実用化しました。このおかげで、世界中で幅広いワクチン接種につなげ、多くの命を救うことができました。

大谷選手の二刀流と同じく、2人の教授は世界の専門家の常識を^{くつがえ}覆す努力を積み重ねました。

その結果、世界中の医療現場に貢献することができました。「人類の福祉に最も具体的に貢献した人びとに授与するために設けられた賞」であるノーベル賞に最もふさわしい研究と製薬の実績ということができるでしょう。

表面的な批判を^{くぐ}潜り抜け、積み重ねた努力に基づき自分が信じる道を進んだ結果を実現する姿勢こそが「不可能を可能にす」ることができるのではないのでしょうか。